

〈紹介〉

分水嶺としての丸山優

Masaru MARUYAMA as a watershed in our lives

世界には無数の山が存在しているが、どれもが分水嶺としての山稜に属しているわけではない。同様に、わたしたちも人生のなかで多くの人びとに出会うが、その流れを決定づけられるような出会いは稀である。しかし、私が知る限り、丸山優先生との出会いを人生の分水嶺として捉えている人は少なくない。寄稿していただいた広島大学の森良次先生もその一人であろう。

丸山先生が分水嶺のような存在に成りえた理由は、森良次先生の言葉を借りるならば、「理論志向の強い経済研究者」であり、「日本社会が直面するそのときどきの問題状況に向きあい、そこから研究課題を導出する社会変革志向の強い研究者であった」という評価と関係している。理論的枠組みを求める者にとって、丸山優先生との議論は実に有益であった。時節の諸問題に正面から向き合い、社会変革志向の強さは、経済史という一つの領域に留まることなく、いかなる理論にも対応することが可能であった。広い視野、懐の深さは、多くの人びとにとって分水嶺としてあり続けた理由の一つである。

しかし、理由はそれだけではない。何よりも重要な点は、強い理論志向の根本には絶えず、資本主義の分水嶺を探し求める思考があった。この深い思考こそが、ブレない理論を構築し、わたしたちにとっての分水嶺であり続けた理由である。すなわち、資本主義の分水嶺を探し求める思考が、“分水嶺としての丸山優”を作り上げたといえる。

ただし、丸山優先生を一つの分水嶺として理解することは、善き師であることを証明するに過ぎない。いわゆる周辺からの評価であり、称賛や感謝の言葉を積み上げてその核心には迫れない。いうまでもなく、その核心とは、資本主義の分水嶺に対する思考の痕跡にほかならない。しかし、それをたどることは実に有意義な作業であるが、誰もが手掛けることはできない。少なくとも経済史という専門領域から探求しなければ、決してその流れの源泉を理解することはできない。

その任をやり遂げることができるのは、森良次先生をおいてほかに存在しない。「〈解題〉丸山優のイタリア経済史・ポスト大量生産体制論」には、見事なまでに思考の痕跡が記されている。この痕跡は、周辺に在する者からみれば、新たな理論的枠組みの構築の手助けになる。異なる分水嶺を知るための手掛かりになる。まさに分水嶺を失った者からみれば、美しき財宝である。

もっとも、森良次先生には、大変な仕事を押し付けてしまったという気持ちで一杯であった。

依頼はしたものの、忙しさを理由に断られても仕方がないとどこかで思ってもいた。ところが、約束は守られた。そして、わたしたちでは決して知ることができなかった丸山優先生の思考は蘇った。感謝以外の言葉が見つからない。

最後に、森良次先生が、この作業を通じて、師である丸山優先生の背中を捉え、近い将来、追い抜くことを心から願いたい。とはいえ、勝手ながら、その日は近いと予想もしている。

『経済論集』編集委員

原田 忠直